

# 医見拝聴

「出産考」

朝日新聞千葉総局 神元 敦司

11月7日に長女が生まれた。初子だけに、「父親になつたのよ」と周囲に言われることがまたまた照れくさい私を尻目に、祖父母は待望の初孫に目を細めている。私は昨年2月に実父を失つた。それだけに、実母が長女をあやしなからおむつを取り換えているのを見ると、ことごとくほろりとする。

普段は医療機関にかからない私だが、この10カ月は産婦人科に足しげく通つた。小児医療の問題は朝日新聞でも取り上げるテーマだが、まさか自分たちが直面するとは思わなかつた。

9月1日。私は会社の定期異動で柏市から千葉市に転勤した。移動距離はさほどでもないが、当時妻は妊娠7カ月だったので心配だつた。妻には引越越し作業をさせなかつたが精神的に疲れたようだ。私は転勤初日の午前6時50分、腹痛を訴える妻の声を覚えた。

まずは掛かりつづけた柏市の産婦人科医院に電話した。すると自宅近くの産科医に相談した方が良くとアドバイスされた。電話を切り、すぐさま自宅近くの産婦人科に窮状を訴えた。女性が出たが、「専門医がいなし」と診察を断られた。

妻を見ると顔をゆがませて苦しんでいる。心を落ち着かせて119番通報した。私の自宅は新築アパートなのですぐに救急車が来るのかと心配だつた。その不安もつかの間、約7分でやってきた。そこまでは早かつた。

3人の救急隊員が声を掛け合いながら機敏に妻を救急車に運んでくれた。だが搬送先の病院が見つ

からなかつた。救急隊員の一人が千葉市内の病院に電話したが、「空きベッドがない」と門前払い。市の広報誌や新聞で見る限り、確か休日・救急当番医だつたはず。別の病院にも断られた。別の病院には救急隊の一人が、「患者さんは今日、千葉に引越してきたばかりなんです」と私たちの事情を代弁してくれた。が、にべもなかつた。

通報からすでに30分が経過していた。「掛かりつづけた柏の病院に行きましようか」。私が切り出した。救急隊の人たちは、「距離と時間」に躊躇していたが、最後は快諾してくれた。

「本当に申し訳ありません。これが医療の現状なのです」

そう言いながら救急隊の一人が私に頭を下げた。台数に限りのある市内の救急車を自分たちが独占してしまつて申し訳なさを感じ、私の方がかえって恐縮したのを覚えている。

サイレンを鳴らしながら渋滞の国道をすり抜け、約1時間10分後に病院に着いた。「お母さんも赤ちゃんも大丈夫ですよ」。診察を終え、看護師の二言に胸をなで下ろした。

その後、若手県の実家で出産した妻と子は、年明けに千葉市に戻ってくる。今から自宅近くの小児科病院を見つけないか、と思う。「不測の事態」は今後、数多く起こるだろう。何でもかんでも病院に行けば対処してくれるとは思わないが、県内のとりのわけ都市部の病院の受け入れ態勢を、果たして信頼しているのだろうか。

## 千葉県医師会健康宣言

# みんなで高めるいのちの価値

千葉県医師会は、こんな活動を推進しています。

### 地域連携

地域に開かれた医師会として、患者さんの団体やボランティア団体、行政との連携をさらに深めます。

### 情報公開

患者さんと医師との一体感を強める情報公開につとめ、IT時代にふさわしい医師会をめざします。

### 新世紀の医療へ

高齢者社会に対応して新しい健康価値観の創出、環境や生態系との関わりを考慮した医療を追求します。